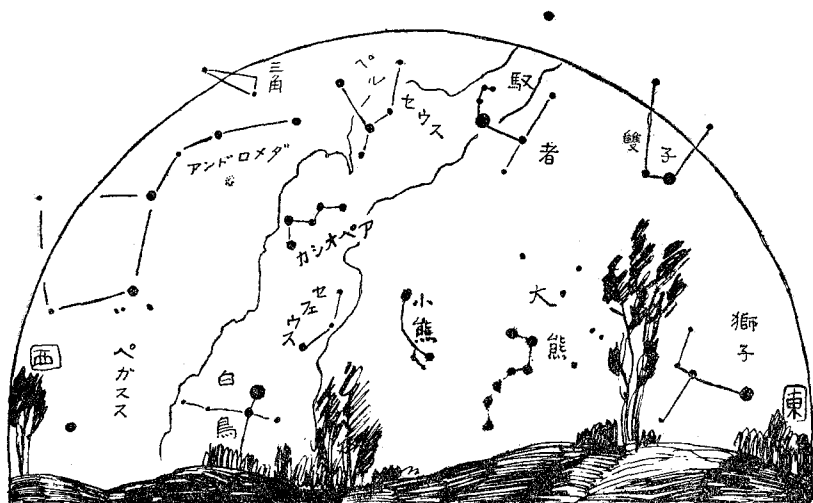
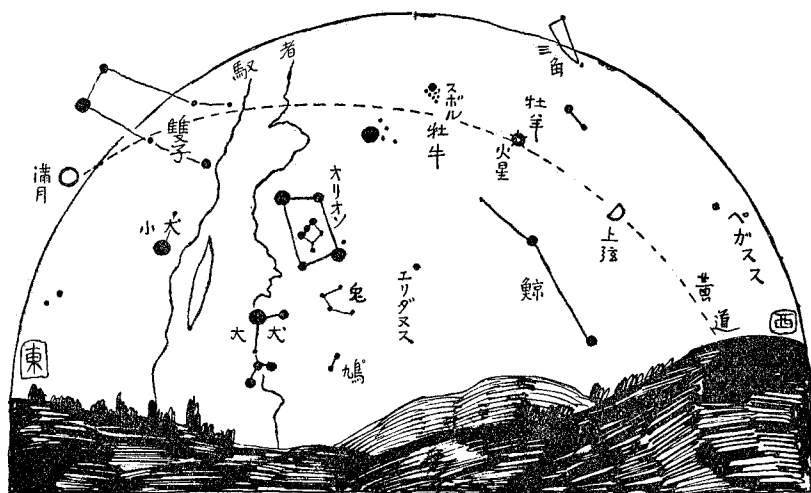




一月中旬の北天（午後九時頃）

一月の星の空（北半）

木枯しの彼方、白鳥は沈み、
 セフェリアカシオペアは其れに續き、地下へと急ぐ。
 其れに引きかへ、大熊と獅子とは相競ひて東北の地平より登
 る、小熊も亦——
 天頂には偉大なる太陽星カペラと其の子星たちが時を得顔、
 ペルセ座は燈臺星アルゴルが永久に其の規則正しい明滅をくり
 かへしてゐる。



一月中旬の南天（午後九時頃）

一月の星の空（南半）

オリオンを、其の赤星、青星、「三つ星」、星雲を中心として、

一步御先きを承はる牛座を其のすばる宿、

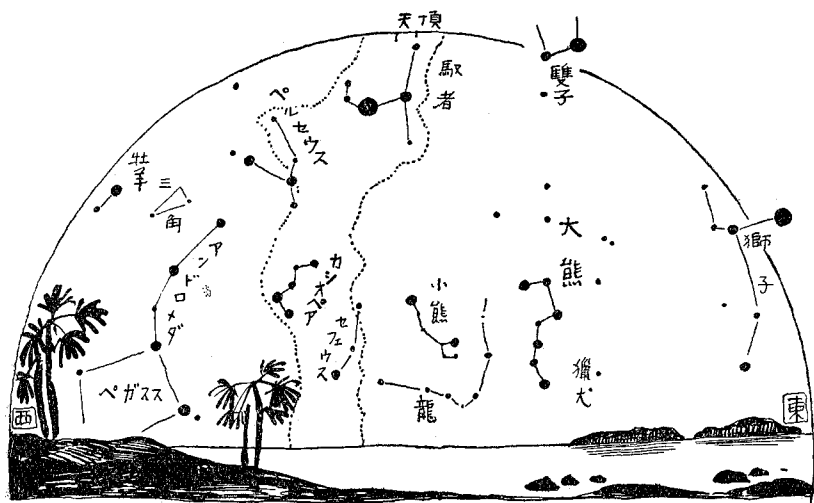
あまからは大犬と小犬、

此れ等に挟まれる冬の銀河、

冬の夜の鋭びささ、シンセリテイを、神々しさを此等の星々

の配列に見せて、足取り強く、天はめぐる、

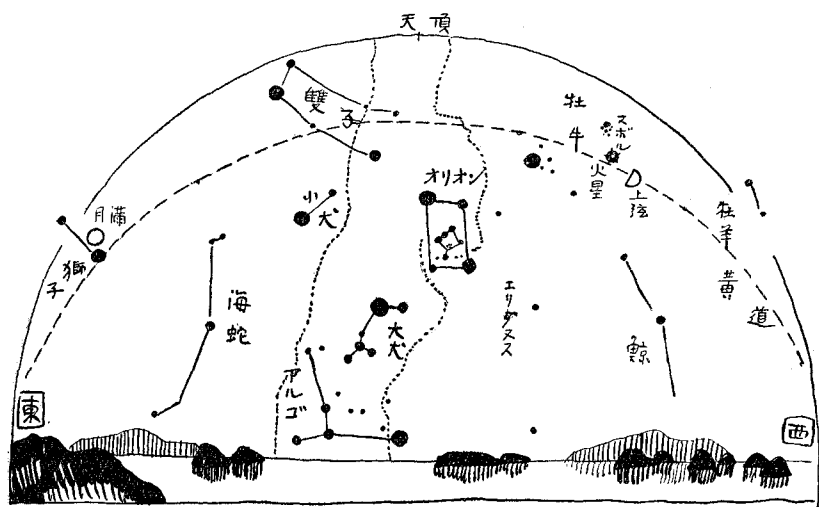
一年に一度の、此の冬の星座の美を見る者は幸ひなり。――



二月中旬の北天（午後九時頃）

二月の北天の空

正北の高みにまたゝく北極星を兩側から挟んで、
 右には大熊の北斗七星が直立し、
 左にはカシオペアの愛らしい W が逆立してゐる。——
 小熊の星列と共に、此等の星々は、天然が人の世に教へる大き
 い時計である。時分秒を測るにも、歳紀を數へるにも、人造
 の機械以上の精巧な正確な星は與へる。



二月中旬の南天(午後九時頃)

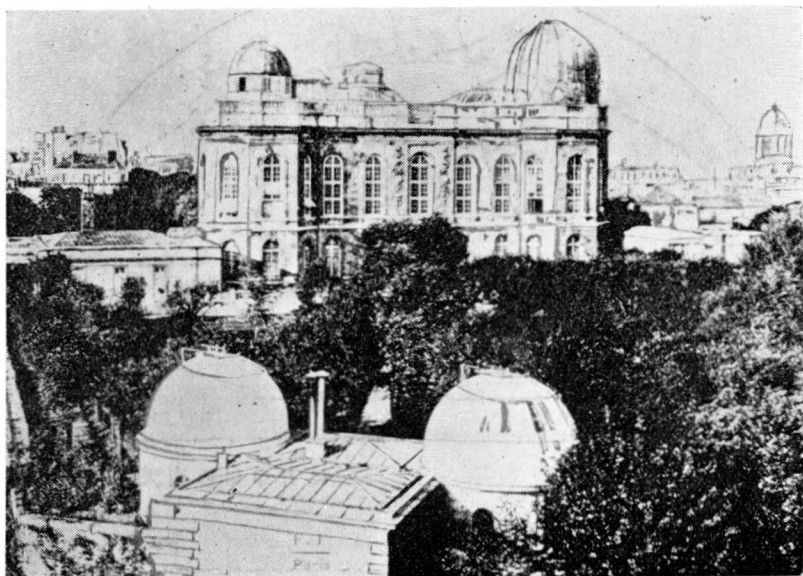
二月の南天の空

天の河は直立して天に聳へ、

オリオンと大犬とは星空の中央最高位に其の誇らしい輝やきを
恣いまいにしておる。

南の水平線が遠く開けた土地からは、低く、アルゴ座の一角に
カノボスの珍しい光を見るのも、時は今である。——

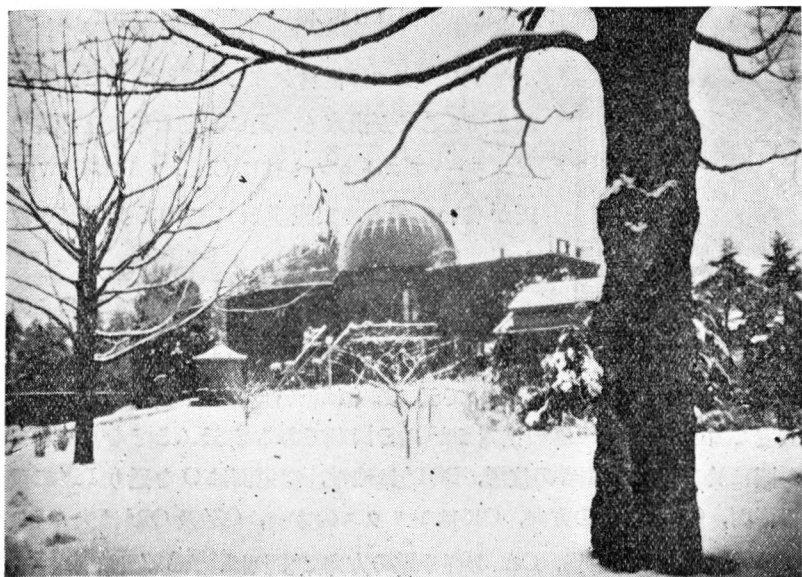
寒い時の星観きには、苦痛を償ふに足るだけの價は得られる。
衰へ行く火星の光を牛座に追ふのもあはれである。



パリー天文臺

(世界天文臺巡り……其一)

セイヌの流れを少しく南に離れたモンパルナスの丘の上に、大きな四層樓を中心とする此の天文臺は、ルイ十四世の意を受けて J. D. カシニが創立し、其の子カシニ、孫カシニ、更に其の子カシニと、同じ家族が四代つづいて臺長となつた所である。ナポレオン時代にはラプラス、第十九世紀に入つてからはアラゴ、ルヴェリエ等の天才たちが、皆此所に根城を構へて學界に氣を吐き、フランスの名譽と誇りを集めた。——今此の場所は、パリ市内の可なり賑やかな邊りとなつてしまつてゐるが、正門より正しく北に〔天文臺ブルヴァール〕の大通りを越へてリュクサンブールの美術館と相對してゐる。此の寫眞は、北面して、天文臺を裏側から見た景色であるから、正門も〔ブルヴァール〕も見えないが、右端に高くパンテオンの塔が見えてゐる。



ヴツサー學院天文臺

(世界天文臺巡り……其二)

ニウヨーク州の中ほど、ホドサン河の東岸に立つボキブシーの市はヴツサー女子學院のために有名である。此の學院の天文臺で、アメリカ天文學會の第三十一回大會が開かれるさいふので、自分は1922年末に近い二十七日、ケンブリッジから此の市に着き、フアネス女史に迎えられて、學生寄宿舎の一室に案内せられた。——翌朝、起きて見れば大雪が降つて、家も木も皆銀色に美しい、珍らしい景色で、小兒のやうに元氣付いた自分は早速外へ飛び出して、いろいろの景色をカメラに収めた。此の寫眞は其の時撮つた天文臺の雪景色である。冬枯れの木々の間に、十二時の屈折望遠鏡を入れたドームを中央にして、教授と研究のために一揃ひの設備を持つてゐる。寫眞の右の手前に子午線機械の觀測室があり、其の近くには、寒暖計を入れた百葉箱などが置かれてある。——アメリカとして、何も誇るに足りない一天文臺ではあるが、此の建物と設備を通じて、女學生たちが星と宇宙の神秘を教へられる幸福は、日本では未だ見られない圖である。(山本)